



創立151年

教育目標 わたしから考える子 にこにこ元気な子 つづけてがんばる子 こころを合わせる子
わにっこり

和邇小だより 令和7年 1月号

児童数384名 文責 澤村幸夫



子どものなかの宇宙

謹んで新年のお慶びを申し上げます。今年も、地域の皆様、保護者の皆様の温かなご支援とご協力をいただきながら、一人一人の子どもたちが心身ともに健やかに成長してくれますよう努力して参りたいと思います。



元日（2025年1月1日、10:35）北校舎を見上げ撮影

年末の12月18日に、民間ロケット「カイロス2号機」が打ち上げられましたが、トラブルが発生し、3月の初号機に続き2回目の失敗となりました。ニュースでは、打ち上げを見学した人からの落胆の声が報道されていましたが、昨年本校で講演を頂いた植松努さんの「失敗はデータ」という言葉どおり、企業はすでに3号機の打ち上げに取り組んでいるようです。「打ち上げ失敗」と私も表記しましたが、「失敗」ではなく「成功への大切な前進」と捉えるべきでしょうね。和邇小学校の子どもたちには、何事にも「果敢に挑戦」して、「失敗ではなく、成功への確かな前進」をしてほしいと願っています。

さて、この正月、日本の心理学者、教育学者として有名な河井隼雄（かわいはやお）さんの「子どもの宇宙」という本を読みました。本の冒頭に次の言葉があります。



この宇宙のなかに子どもたちがいる。これは誰でも知っている。しかし、ひとりひとりの子どもの中に宇宙があることを、誰もが知っているだろうか。それは無限の広がりと深さをもって存在している。大人たちは、子どもの姿の小ささに惑わされて、ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまう。大人たちは小さい子どもを早く大きくしようと焦るあまり、子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりする。このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」や「善意」という名のもとになされるので、余計にたまらない

感じを与える。私はふと、大人になるということは、子どもたちのもつこのような素晴らしい宇宙の存在を、少しずつ忘れ去ってゆく過程なのかとさえ思う。それでは、あまりにもつまらないのではなかろうか。

子どもたちの澄んだ目は、この宇宙を見すえて、日々新たな発見をしている。しかし、残念なことに、子どもたちはその宇宙の発見について、大人たちにはあまり話してくれない。うっかりそのようなことをすると、無理解な大人たちが、自分たちの宇宙を破壊しにかかることを、彼らは何となく感じているのだろう。それでも、子どもたちの宇宙からの発信に耳を傾けてくれる大人を見出したとき、子どもたちは生き生きとした言葉で、彼らの発見について語ってくれるのである。

河井隼雄さんの本からは、臨床心理学者として実践されてきた姿を通して、心から子どもを尊敬していることが伝わってきます。この本は、子どもが誰しも持っている広大な「宇宙」と、子どもの成長過程における「宇宙」の発見について、多くの視点を見出されています。子どもに携わる私たち大人や保護者に、子どものことを、自立した対等な存在として認めることが大切であることを教えてくれています。



11月26日に、世界一周ヨットの旅を実現した川本真さんに来校いただき、全校の子どもたちに話をさせていただきました。川本真さんは、元大津市立小学校の校長先生で、学生の頃からヨットに打ち込まれ、いつか、自分のヨットで世界一周の旅をしたい、と願われました。退職後、数年かけて準備をされ、2022年4月1日出港、2023年7月22に帰港されたという私にとっては、あこがれの先輩です。

世界一周といえば、「夢のような話」ですが、実際となると苦勞も多かったようです。日数にして478日（約1年4か月）、挑戦とはいえ、安全には細心の注意を払い、そのための準備が重要でした。航海をする仲間の存在も大きかったようです。川本さんはすべての航海を担いましたが、常に3人の仲間が入れ替わりながら、1日を3交代で進行されました。さらに、日本にいるサポートチームからの情報を頼りに、気象情報や国際関係など、多くの支援を受けながら、無事、世界一周を達成されました。途中、セールが破れたり、航海機器が故障したり、レーダーが海に沈んだり、幾多の苦難があったそうです。でも、訪れた国やそれぞれの港で出会った人たちとの交流、それぞれの海が見せてくれる景色は、最高の宝であったそうです。

小学生である子どもたちには、将来に向けての夢を持ち、失敗を恐れず、果敢に挑戦して欲しいと思います。「どうせ無理」とあきらめることなく、前に進んで欲しいと思います。



その日の後半では、卒業を控えた6年生が、本物のモデルロケットを自分の手で作り、全校児童が見守る中、大空に打ち上げることができました。

植松努さんのメッセージビデオを視聴し、6年生は自分の手で説明書を読みながらロケットを制作しました。うまく飛ばなかったらどうしよう、という不安をかかえながらも、一生懸命作りました。

69機ロケットは、1年から5年生が見つめる中、空高く打ち上げることができました。この体験を通して、失敗を恐れず、小さな成功体験を積み上げていくことの大切さに気付きました。

植松努さんの言葉には、多くの学びがあります。「人は足りないから助けあうことができる」「中途半端というのは、何もしないよりいい」「生まれた時からあきらめかたを知っている人はひとりもない」「やったことがないことをやってみる」「人の出会いには意味がある」「人生は人との出会いによって変わる」「勇気を出して誰かに出会

ってみればよい」「能力は経験によって身に付く」などです。

植松努さんの言葉を、ダイジェスト版として短い動画にまとめましたので、ぜひご覧ください。



植松努さんメッセージ

紙面配布のみ表示



期間限定 1/7~2/28

シリーズ「未来への扉」 第11弾「自分の脳に対する信頼」

このコーナーは、子育てと子どもの幸せをサポートする情報を提供するニュースレターです。子育てのヒントやこれからの時代に大切にしたい教育の話、健康で幸せな生活に役立つ情報を掲載したいと考えています。子どもは「地域の宝」です。未来をたくましく生きる子どもたちにつけてほしい本当の力とはいったい何か、子どもが生涯にわたり幸せに生きていくには、周囲の大人はどんな関わりを大切にしていけば良いのか、共に考えていきたいと思います。

第11弾は「自分の脳に対する信頼」についてです。



学校のサルビアの花
本文との関連はありません。

AI(人工知能)の急速な進展に伴い、私たちの生活は大きな転換期を迎えています。生成AIは、瞬時に多くのものを創り出し、分からないことはすべてAIが教えてくれる時代となりました。その背景にあるのが、知能の源である私たちの脳の解析です。何十年も前から、多くの研究者たちが、人間の脳を科学的に研究してきました。それでも、今なお分からないことが多数あるのも事実だそうです。その研究途中で明らかになってきたことが、多くの脳科学者から提唱され、今注目を浴びています。AI(人工知能)が、人間の脳を超えるのか、という根本的な命題も様々な研究者がいろいろな見解を述べていますが、私たちは、まずもって、人間の脳の働きについて正しく理解していくことから始めなければなりません。

私たちは、普段自分の脳で仕事をし、遊びをし、運動をし、ケンカをし、発明もします。自分の脳には、無数の回路が入っていますが、その回路すべてにいつも通電しているわけではないようです。今必要としている場所にだけ通電し、気付いたり感じたり、考えたり、行動したりします。ここで重要になってくるのが、膨大な回路の中から正しい場所に通電できているか、そして流れた電気信号が衰えることなく流し続けることができるか、さらにそのスピードが持続できるか、ということです。

この3つを実現させるために必要な生活習慣が、繰り返しこのシリーズでお知らせしている(令和6年度学校だより夏休み号・9月号に掲載しています)「早寝」「早起き」「朝ごはん(起きて1時間半以内にきっちり咀嚼する朝ごはん)」「運動」です。単に、規則正しい生活というだけでなく、こうすることで分泌される脳内物質が私たちの行動に大きく影響することが分かってきたのです。この4つがなければ、脳はその状態をキープできなくなり、逆に人間はこの4つをキープすると、脳がうまく動くわけです。

自己肯定感という言葉がよく使われますが、脳科学の視点から言うと、「自分の脳に対する信頼」であると言い換えることができます。しっかり寝て、気持ちよく朝日とともに起きて、ご飯を食べて動き出すと、自分の脳が集中したいと思った瞬間に集中でき、好奇心を感じた瞬間に集中力が発揮できます。脳がしっかり働いているとイライラしたりモヤモヤしたりせず、やる気が持続します。好奇心と集中力と共に1日を過ごしていると、脳は充足した感じになり、その状態を続けていくと、脳は自己肯定感を自覚していきます。よく、自己肯定感を高めるために「褒めることが大切」と言われていますが、実際は人間の脳は自己肯定感を自ら湧きあがらせる力を持っているのです。

しかしながら、現代生活はそれを阻止している要因があまりにも多いと思います。私たち親世代が子どもだった頃、今のような情報や機器が少なく、外で遊び疲れて早く寝て、「寝る子は育つ」がごとく、熟睡していたと思います。そして



学校の高級メダカ
本文との関連はありません。

朝ごはんをちゃんと食べて学校に行き、身体を思いっきり動かして生活していました。時代は変われど、今の子どもたちにも、そういった生活習慣を身につける必要があります。「できるだけやっ페이こう」と目標にするのではなく、その重要性を私たち大人は自覚するべきだと思います。子どもたちに「早寝」「早起き」「朝ごはん」「運動」の4つをキープさせ、自己肯定感を自ら湧きあがらせる環境を整えていくことが、何より大切です。子どもたちの幸せに向かって、実際に行動に移していく必要があります。

癒しのアクアリウム

ここを
クリック

期間限定 1/7~3/31